氏　　名	佐藤和子
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	乙第3号
学位授与日	平成31年3月日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
論文題目	ポストモダン社会のデザイン ーイタリアのアヴァンギャルド・デザインの根底にあるものー
審査委員	主査　女子美術大学大学院教授　横山勝樹 副査　女子美術大学大学院教授　稲木吉一 女子美術大学大学院教授　山野雅之 ㈲川上デザインルーム主宰 （公財法人）日本デザイン振興会会長　川上元美

内容の要旨

概要

二十世紀はデザインが支配した時代ともいわれ、近代デザインは、1919年以降、バウハウス理論が世界に拡がり、世界第二次大戦後も脈々とその正統性を誇示してきた。

本論は、その正統なるデザインに疑問を投げかけ、機能一辺倒の合理的デザインを否定したイタリアのアヴァンギャルド・デザインをテーマにして、デザインの持つ本当の意味を考えたいというのが主旨である。

イタリアデザインは、世界大戦後、二度のデザインブームを経験してきた。

初めは、「モダンデザイン」の芽が大きく開花して、「デザイン黄金時代」と云われた1950年から60年前半までの時代だ。次は「ポストモダン・デザイン」の八十年代だった。

この「モダンデザイン」から、「ポストモダンデザイン」に至る約10年間の時代は、イタリアの社会が政治・経済ともに混乱した時代であった。この七十年代に活動したのが、今までの合理主義や機能主義を否定する、ラディカル理論を掲げた若い建築家やデザイナーたちであった。

既存の社会や文化に物申す、彼らのアヴァンギャルド活動は、安定を求める社会には受け入れがたいものであったが、常識に反対する「ポストモダン・デザイン」の行動は、次の時代を示唆していたと考える。

「ポストモダン」という言葉が、イタリアで大々的に報じられたのは、1980年にヴェニス・ビエンナーレで開催された「過去の現在」という建築展であった。

建築展のディレクターであった、建築史のパオロ・ポルトゲージが、この展覧会の趣旨を、「近代建築の犯してきた汚点を見直し、ポストモダンを宣言する」と述べた。

二度目のイタリアデザイン・ブームを引き起こした、八十年代の「ポストモダン」時代に、二つのア

ヴァンギャルド・デザイン・グループがミラノに誕生した。

一つは、七十年代に活躍したラディカル建築グループが、リサーチしていたデザインを発表して、新しい活動を始めた「スタジオ・アルキミア」であり、もう一つは、そこからより商業的に新しい市場を開拓すべく出発した「メンフィス」という集団であった。

そこで、ポストモダン社会の中で生まれてきた、これらアヴァンギャルド運動の背景と、その経緯を浮かび上がらせることは、アヴァンギャルドが、どのように社会に影響を与えたのか、そして、どのように社会に融合して広がっていったのかという理解にもつながり、このことは、近代デザイン論を検証する上でも大事なことだと考えた。

イタリアのアヴァンギャルド活動は、二十世紀初めに起こった「未来派運動」にも見られるように、二度の世界大戦に揉まれながら、芸術、建築、デザインの近代化に大きな影響を及ぼしてきた。「ポストモダンの社会」を反映する八十年代のイタリアデザインは、かつてのイタリアの「未来主義」と、「ポップアート」の影響が強くみられる。

そこで二十世紀の初頭から起きたイタリア「未来主義」を記述することは大事だと考えた。

本論の流れは、

1. 二十世紀初頭のイタリアにおける産業文化組織がが、どう形成されていったかを、トリエンナーレの誕生の経緯から始める。他のヨーロッパ諸国から近代化の遅れをとったイタリアは、急いで国内の応用美術の育成や、国際的な展覧会開催を準備していく経緯を記述する。
2. そして同じ時期に発生した、最初のアヴァンギャル運動の未来派の動向と、アーティストたちの活躍を記述する。数多くのマニフェストを発表して、文学、建築、絵画、音楽など、多方面にわたって未来派は国際的に広がった。政治にも興味があった未来派は、ムッソリーニとの親交と離反を繰り返しながら、アヴァンギャルド活動を行ってきた。
3. この間、ヨーローッパ諸国との交流があった近代建築とデザインの運動は、若いイタリアの合理主義建築集団が結成されるなど、ファシズムを超えた活動を始めていた。一方、デザインでは、バウハウスの流れをくむプロダクトデザイン、アドヴァタイジングデザインの分野において、オリベッティのデザインが群を抜いていた。戦争終了後のイタリアデザインの輝きは、オリベッティのデザイン力とリサーチの蓄積が大きいと思う。
4. 戦後から60年前半にかけては、経済が上向きの中道右派の政権も安定し、モダンデザインの黄金時代と云われた。トリエンナーレに日本館が参加したのは1957年である。
5. 近代デザインに陰りが出てきた頃から、ラディカル建築のアヴァンギャルド運動が芽を出してくる。1968年の社会改革運動は、今までのイタリア社会の風景を変えてしまった。
6. 八十年代の「ポストモダン・デザイン」は、アヴァンギャルド・グループの活動で展開した。ヴェニス・ビエンナーレでの「ポストモダン宣言」と、具体的には、アルキミアとメンフィス・グループの成立から終焉までを軸に、その周辺のDOMUS誌や、デザイン企業の動きを記述したいと考えた。
7. 最後は、イタリアのアヴァンギャルド・デザインの根底にあるものは何なのか。そこから生まれて

きた若い世代の活動と、デザインの広がりを見て、これからのアヴァンギャルドの風景がどういう景色になるのかを考察した。

審査の結果の要旨

論文審査までの過程

佐藤和子氏は、1961年に女子美術大学芸術学部図案科卒業、同年に東京芸術大学図案専攻科に入学をし、さらに文部省イタリア政府招聘留学試験に合格して同年10月ミラノ・ブレラ美術アカデミー装飾科に入学した。招聘留学生終了後はミラノにとどまり、ロドルフォ・ボネット・インダストリアルデザイン事務所に勤務した。ミラノではその後、1970年から建築デザイン事務所を主宰し、1980年から2001年まではDOMUSの企画編集員となるなど、イタリアのデザイナーと日本のデザイナーをとり結ぶさまざまな活動を行った。また1981 年には、イタリア工業デザイン界で最も名誉ある賞とされているコンパッソドーロ賞を共同受賞したほか、オーストリア・リンツでのフォーラム・デザイン展では日本人唯一のデザイナーとして活躍した。日本帰国後は、大同工業大学、金沢美術工芸大学、女子美術大学で客員教授を歴任している。

長年にわたる著作活動においては、1985年刊行された「アルキミア：終わりなきイタリア・デザイン」、1995年の「時に生きるイタリア・デザイン」をはじめとしてイタリア語、英語、日本語で著された多数の著書がある。またDOMUS をはじめとする多数のデザイン・美術専門誌において、論文・評論・記事を寄稿し、2017年に女子美術大学が発刊した「International Design」では「イタリア・デザイン」の章を分担執筆している。

審査は、まず平成30年11月30日に予備申請された論文に対して、標記審査員全員が、構成・図版・注釈などについての幾つかの指摘を行なった。それを受けて佐藤氏が論文内容の組み替え、加除、訂正を行ない、平成31年2月8日に提出された本論文をもとに平成31年2月23日最終審査が行なわれた。

論文審査

佐藤氏は「ポストモダン社会のデザイン—イタリアのアヴァンギャルド・デザインの根底にあるもの」の序論において、「なぜ二十一世紀の今、イタリアのアヴァンギャルド・デザインなのか。それは、デザインの時代だった二十世紀のアヴァンギャルド運動から学ぶべきことが、とても多いと考えたからだ。」と述べている。そして本論は、その探求を行うために近代デザインが衰退していく60年後半から70年代にかけてのアヴァンギャルド運動の軌跡を、その背景となった戦前から記述をはじめている。そして既成の概念を否定し、古いものから新しい芸術活動へと転換していくイタリアのアヴァンギャルド・デザインの底辺にあるもの、そしてこれからの二十一世紀のアヴァンギャルド・デザインの向こうにあるものとは何かを考察している。

論文は、具体的には次の５章で構成されている。

第1章においては、二十世紀初頭のイタリアにおける産業文化組織の形成を考察している。それは近代産業とデザインを「応用美術」「装飾美術」の中で、どう発展させて行くのかを模索する時代であり、

ミラノの社会主義思想の知識人たちの活動と、政権を奪ったファシズムとの攻防が、アヴァンギャルド運動と混じりあいながら、イタリアの近代化が進んだとしている。

第2章においては、最初のアヴァンギャルド運動としてイタリア未来主義を考察している。この運動の広がりは、文学、美術、彫刻、ダンス、音楽、写真、建築、デザイン、衣装、演劇、料理、政治の分野にまで広がり、その過激な言動とパフォーマンスはあらゆる分野に広がったことが述べられている。

第3章においては、イタリアの合理主義とデザインの考察を行っている。「グルッポ・セッテ」によるイタリア合理主義建築宣言をその始まりであり、またオリベッティは、イタリアのモダンデザインの基礎を築いたが、バウハウスの精神をくむ合理的で美しいデザインは、同時にアヴァンギャルドの企業であったと指摘している。

第4章においては、イタリアのモダンデザイン黄金期として、「コンパッソドーロ賞」や、インダストリアル・デザイン協会（ADI）の設立、ミラノ・トリエンナーレの隆盛が述べられている。

第5章では、脱工業化とアヴァンギャルド・デザインの発生が述べられている。近代化に邁進してきた社会の行き詰まりや「反機能主義」「反合理主義」の機運の高まり、若いアヴァンギャルド建築グループのスーパースタジオやアルキズームによる「ラディカル建築」「反デザイン」運動の展開が考察されている。

第6章では、本論の主題であるポストモダン社会のデザインとアヴァンギャルドが考察されている。1980年ヴェニス・ビエンナーレで、「ポストモダン宣言」が発表され、ミラノに二つのアヴァンギャルド・グループ「アルキミア」と「メンフィス」が誕生した。グループの発生から終焉までの軌跡が、著者自身の現地での体験を通して考察されている。

第7章では、二十一世紀のアヴァンギャルド・デザインの向かうものとして、東西冷戦時代後の時代の変化と共に、イタリアのアヴァンギャルド運動の終結、そして新しい技術によるデザイン研究や、人間の五感や手作業の重要性の再確認とともに子どもの世界とデザインの世界を結びつける協同研究作業など、二十世紀デザインの再検討がされている。

以上本研究は、60年代後半から70年代のアヴァンギャルド運動の軌跡を、イタリアの政治・社会情勢とともに記述し、そのうえで80年代に大きな社会現象にまでなった「ポストモダン社会のデザイン」に焦点をあてたものである。時代の変革時に起きる、既成の概念を覆すアヴァンギャルドの芸術運動は、常に社会の真実を映し出す鏡となり、古い体制からの脱却は人々の感動を生みだすものであると結論付けられているが、この結論は豊富な図版資料、参考文献、さらには著者自身の実体験による多角的な考察により導き出されている。これにより本論文は、ポストモダニズムをアヴァンギャルドの観点から再評価しようとする意欲的な論考になっていると言える。

以上の通りの論文の評価により、佐藤和子氏の学位請求は、審査委員全員の合意をもって合格と判定された。